

「高価な真珠」マタイ 13：44-46 木村一充牧師

この朝お読み頂いたマタイによる福音書 13 章には、いくつかの神の国のたとえが書き記されています。神の国とは、神さまのみ心がそこに集うすべての人によって行われ、「神の支配」が完全な形で実現しているそのような世界のことです。私たちが住んでいる地上の世界では憎しみや敵意、戦争や収奪、差別や分断が、今なお続いています。神の国はまだ来ていません。主イエスは、そのような現実世界に生きる私どもに、たとえ話で神の国のことを語ってくださいます。「たとえ」とは比喩のことです。比喩には二通りあって、直喩と隠喩と呼ばれるものがあります。直喩とは、文字通りストレート（直）にたとえる表現方法です。たとえば、「あの子の頬はりんごのようだ」という言い方です。それに対して、隠喩は遠回しな言い方です。たとえば「あのとき、僕の心の中はどしゃぶりの雨だった」比喩であることを示さないため、かえって強い印象が残るのです。イエスの時代のユダヤのラビたちの中で、イエスほど巧みにたとえ話を用いて神の国のことを説き明かす人はいませんでした。その意味で、イエスは説教者としても飛びぬけた才能の持ち主であったと言ってよいでしょう。

そこで、本日お読み頂いた箇所に入ってゆきます。二つの段落では高価な宝物、すべてを投げ打ってでも手に入れた宝物を手にした人のことが語られています。皆さんにとって、最大の宝は何ですか？ これまでもっとも高価な買い物は何だったのでしょうか。私自身のことを申し上げて恐縮ですが、私自身が人生で最初買った高価なものは、ステレオでした。大学 2 年の夏に塾の講師として 1 ヶ月に渡って夏期講習会のアルバイトをしました。その時の給与でステレオを買ったのです。値段はたしか当時の家賃 6, 7 倍だったと思います。それを自分で組み立てて、好きだったクラシック音楽を聴いた時の満足感は今でも忘れられません。主イエスがここで語られているのはそのような宝物を見つけた二人の人の話です。

初めの 44 節以下では、畑仕事をしていた人がそこで宝物を見つけたという話が語られます。彼は畑の持ち主ではありません。そうではなく、主人から雇われて耕作を請け負っていた人、もしかしたら、日雇い人だったかもしれない人です。畑に宝があるということは、パレスチナでは決して珍しいことではありませんでした。イエスの時代の人々にとって、一番安全な場所は地下だったのです。同じマタイ福音書の 25 章に「タラントのたとえ」として知られるイエスのたとえ話があります。主人から、それぞれ 5 タラント、2 タラント、1 タラントを与えられた僕たちが、その管理を任されたというたとえです。5 タラント、2 タラントを与えられた二人の僕たちは、それを元手にして商売をし、それぞれもう 5 タラント、もう 2 タラントをもうけました。ところが、1 タラントを与えられた人は、お金を地面に埋めたままにして活用しなかったという、あのたとえ話です。

当時のユダヤのラビたちは「お金を貯える唯一の安全な場所は、大地である」と人々に教えたといひます。パレスチナは、残念ながら昔も今も、戦争が絶えないところでした。そこは、アジア・アフリカ・ヨーロッパという 3 つの大陸を結びつける交通の要衝として、地政学的にとっても重要な場所だったからです。そのような場所に住む人にすれば、自分の庭がいつ戦場になってもおかしくないという状況でした。だから、人々は少し貯えができると、それを貴金属に換えて壺に入れ、地中に埋めるということをしたのです。わが国でも、だいぶ以前に、竹藪からカバンに入った札束が見つかったというニュースが報道されましたが、銀行などがなかった当時のパレスチナで、宝物を地中に隠すという行為は、ごくごく普通のことだったわけです。

そのようなパレスチナで、ある日地主のもとで働く農夫が畑を耕していると、ゴツツと当たるものがありました。深く掘り起こして見ると、そこに仰天するほどの宝の入った壺があったというのです。農夫は何事もなかったかのようにそれを埋め戻して畑仕事を続け、主人には、いつも通りその日の仕事の成果を手渡して家に帰ります。それからが大変です。その人は、自分の持ち物を全部売り払い、さらには、兄弟や親戚中からお金を借り集めて地主さんのところに行き、あの畑を売ってくださいと頼むのです。事情を知らない地主はびっくりしたでしょうが、あの畑でよければどうぞということで、無事取引が成立したというのです。現代の法感覚から言えば、このような物語の結末は考えられないことでしょう。そもそも、宝物が地中から見つかったということであれば、まずそれを地主さんに報告しなければなりません。すると、地主はそれを全部自分のものとするか、持ち主を探してそれを持ち主に返すか、さらにそれでも持ち主が分からなければ、宝を農夫と折半する、ということになるのではないのでしょうか。しかし、話は 2000 年前のパレスチナの話です。今日のような所有権の考えかたはイエスの時代のパレスチナにはありませんでした。いや、ユダヤのラビの教えでは次のように言われていました。「もし、人が何かを見つけたとき、それが散らされた果実やお金である場合、それは見つけた人のものである」要するに、拾得物はそれを見つけた人のものになるというのがラビたちの教えだったのです。日本にやってきた海外の旅行者が、旅先で財布やスマートフォンを落としたあと、それが警察に届けられ、自分のもとに戻ってきたことに感激するという話を聞きます。外国では、ものを無くしたら、それはもう他の人のものになるというのが常識なのかもしれない。2000 年前のパレスチナも、恐らく同じような感覚だったのでしょう。ゆ

えに、宝物を発見したこの農夫は、その事実を隠し、持ち物すべてを売り払って畑を買い、それを自分のものにしています。

二つめの段落 45 節以下では、良い真珠を探し求めていた商人の話が書かれています。わが国では、三重県の伊勢志摩を産地とするアコヤ貝からとれた真珠が広く知られています。私は真珠を買ったことがありませんので値段がよくわかりませんが、イエスの時代のパレスチナでは真珠は特別に高価で貴重なものでした。当時、真珠が取れた場所は、紅海の沿岸かペルシャ湾、あるいはインドの沿岸だったと言われます。商人たちは世界中の市場を飛び回って、美しい真珠を探し求めていました。言い伝えによると、エジプトの王妃であったクレオパトラが持っていた真珠は、当時の価格で 2500 億円の値段だったといえます。これほど高価な真珠を売り買いすることのできる商人は、相当な資本家でありました。取引はすべて現金で決裁しました。おそらく護衛をつけて、多額の現金が入ったカバンを抱えながら、よい真珠を求めて各地を飛び回っていたことであろうと思います。その彼が、これまで自分が見たこともない最高の真珠をひと粒見つけました。そのひと粒の真珠を買うために、彼は持ち物のすべてを売り払ってこれを買ったというのです。彼の持ち物の中にはそれまで彼が仕入れてきたほかの真珠があったことでしょう。それを全部換金しても、まだ足りません。それに加えて、自分の土地や家屋敷、さらには商売を続けるための資本金があったことでしょう。彼はそのすべてを売り払って現金に換え、最高のひと粒につぎ込んだのであります。結果的に、彼はもはや真珠の商人としての仕事もやめざるを得なかったと思われる。手元に残るのはひと粒の真珠だけという姿は、ある意味で常識外れの行動であったと言わねばなりません。

この二つのたとえ話を通して、主イエスはいったい何を語ろうとされているのでしょうか。この二つのたとえ、宝物を見つけた農夫と、高価な真珠を買い求めた商人の話には、確かに異なっているところがあります。農夫のほうは宝物を偶然、生活の現場で見つけました。一方、商人のほうは真珠を得ようと意識して世界中を飛び回り、ついに最高のものを見つけています。また、その金額にも違いがあります。畑の値段よりも、真珠の値段のほうのはるかに高額であったに違いありません。クレオパトラが身に着けていたものほどではないにせよ、真珠のほうは商人が自分の全資本を投じるほどの値段だった。桁違いだったことでしょう。しかし、この二人には共通するところがあります。それは、この二人が持っているものをすべて売り払っても惜しくないものを手に入れているということです。彼らは、宝物や真珠を見つけて、心から喜んでいるのです。「やったー！」と叫んだかもしれません。そして、この二人に共通する事柄こそ、主イエスが私どもに語っておられる神の国のメッセージであります。

それは、分かりやすく言えば次のことです。すなわち、神の国、すなわち天の国に入る喜び、神の愛を知り、その救いに入れられる喜びは、他の何物にも代えがたいほどに大きいということです。天国に入るとは、神のみ心を受け入れてそれを行うということです。それを行うためには、それまで自分が大切に思っていたものを捨てなければなりません。この世での成功や富、誉れを求める心を捨て、それまで自己中心に生きていた生活習慣を改め、イエスに従う生き方を選び取るのです。しかし、そのように神のみ心に従って生きることは、ほかの何事にもまさって素晴らしいことなのです。人は何のために生まれてきたのでしょうか。それは、その人の存在が、他の人に必要とされるためです。あなたがなくなったら、私は悲しい。私にとってあなたが必要だと言ってくれる人を持つ。それが、私たちがこの世に生を受けた一番の理由です。そして、そのことを無条件に言うてくださるお方、それが聖書の神さまなのです。「わたしの目に、あなたは高価であり、貴い。わたしはあなたを愛している」（イザヤ 43：4）預言者イザヤは、この言葉を残しています。

さらに 45 節以下の段落で、高価な真珠の話が出ていますが、天国は真珠にたとえることができます。すなわち、天国が世界で一番美しいということです。この世界には美しいものがたくさんあります。音楽、美術、文学、また人間が作りだした学問や建造物など、美しいものは山のようにあります。しかし、よくよく考えてみると、最高の美とは神のみ心にかなうもの、神のみ心に従うものではないでしょうか。その証拠に人間が作った建築物が、どれほど美しくろうと、神さまが創られた大自然の美しさに比べたら、その足元にも及ばないではありませんか。さらに、人間が作ったものは、いつかは朽ち果ててボロボロになりますが、神さまが創られた自然はいつまでたってもその命を失わない。神さまが創られたものは、美しさを保ち続けることができるではありませんか。

そのような美しい宝物を、じつは私たちは持っているのです。この宝を神さまがくださったのです。それは、神がこの世界を愛するためにご自身の独り子をこの世に送り、世の罪を贖うことによって、わたしたちに永遠の命を与えることで現実になりました。私たちは、神の子イエスを信じることで神の子とされ、天国の富を受け継ぐ者とされたのです。私たちは、神の恵みと祝福の中に入れられているのです。宝物を見つけた農夫、高価な真珠を手に入れた商人とは、私たち自身のことであります。

お祈りいたします。